

「高校生が被災地で考える防災サミット in Fukushima」に参加してきました

平成30年12月25日(火)から27日(木)までの2泊3日の日程で、「高校生が被災地で考える防災サミット in Fukushima～原発と私たちの未来を描く～」に生徒代表2名が参加してきました。

この防災サミットでは、全国の原発所在道県の高校生約40名(17校)がJヴィレッジ(福島県楡葉・広野町)に集い、被災地を見学したあと、テーマに沿ったワークショップを行い、意見発表と提言を行いました。

1日目は、環境省が管理運営する特定廃棄物埋立情報館「リプルンふくしま」と特定廃棄物埋立処分施設、そして福島第二原子力発電所のそれぞれを見学。Jヴィレッジでは4つのテーマごとの班に分かれ、最終日の意見発表・提言に向け、ワークショップを始めました。夜は、避難時宿泊体験も行いました。

2日目は、ワークショップと発表の準備をしました。4つのテーマはどれも難題。コーディネーターの開沼博・立命館大学衣笠総合研究機構准教授の指導助言のもと活発な意見交換を行いました。

3日目は、ワークショップで話し合った内容を意見にまとめそれぞれの“提言”として発表。福島県内の行政・教育関係者・一般参加者ら合わせて約220名が発表会場に会場に訪れました。安倍昭恵首相夫人も訪れ、「自分で行動し経験したものを、広く世界と未来に発信してほしい。」と期待を寄せて下さいました。



【参加生徒の感想】

宮城県多賀城高校 2年 木下有優

「今回の福島県でのサミットでは、福島第二原子力発電所の訪問、避難所体験、ワークショップ、パネ

ルディスカッションなど3日間でとても濃い経験をさせていただきました。

私がその中で特に印象に残っているのはワークショップです。ワークショップ自体は何度も参加したことがあるのですが、今回はほかのサミットと比べてとても濃いワークショップでした。私の班のテーマは「数値化されにくい災害被害について考える」というものでした。始まってすぐから話し合いは難航し、その日の午後3時にあった中間発表ではまだ白紙のような状態でした。何度も話し合いを重ね、時には振り出しに戻ってしまう事もありました。また、午後9時から始まった最終日のパネルディスカッションのリハーサルなどで1時間ほど時間が潰れてしまうなどで、話し合いの時間がだんだん少なくなっていました。気付いた時には次の日になっていて、前日リハをやったのは次の日の午前3時でした。そこから講師の先生にアドバイスをいただき、なんとか形になったのは午前4時前でした。それでもなんとか話し合いを自分達の納得のいく形にまとめることができ、最終日の発表はとてもいいものになったと思います。

今回のサミットでは北は北海道、南は佐賀県など全国から集まってきていました。日本中のたくさんの人と深夜遅くまで話し合いを重ねる機会は人生の中でもとても貴重な経験だったと思います。今回の繋がりを大切にしながら、これからの活動、進路実現など色々なところに生かしていけるように頑張りたいと思います。」(2年災害科学科 木下有優)

「2018年12月25日から27日にかけて、福島で行われた「高校生が被災地で考える防災サミット in 福島」に参加してきた。昨年の夏に行われたハイスクールサミット in 福島に参加し、そのときの主催者であった西本さん主催のものとなって参加を決めた。昨年に比べ学校の授業でも災害について、特に東日本大震災について詳しく学び、福島に対する気持ちは昨年よりも強く、意欲も高く臨んだつもりだった。

特定廃棄物埋立情報館「リプルンふくしま」や福島第二原発を視察し、その後グループディスカッションを行なった。私の班は「災害発生時に若者がどのように活躍するか」という議題で討論を進めた。はじめは若者にしかできないことを必死に考えたが、大人と我々を比べても、行動力も発信力も経済力も大人の方が上だということがわかった。そこで私達は、大人でもできるが若者にもできる、大人がやるよりも若者がした方がいいだろうと思うことに内容を転換し討論した。その結果、①若者は大人から見れば子供、高齢者の方から見れば孫、小さい子達から見ればお兄さんお姉さんの存在である。②若者は失敗してもやり直す機会があり、そういった意味で失敗を恐れない、などということがわかりそこを軸に固めて発表を仕上げた。

いつもとは違う環境や朝から晩までのディスカッションでとても疲れたが、達成感やほぼ一日しか交流していないのに生まれた友情はとても大きな思い出となった。「実際に現地をみた」という利点、自分の意見のまとめ方などたくさん得るものがあったので、それを今後生かしていこうと思う。またこの会で発表した内容はまだまだ深めることのできる内容なので、今後も自分なりに考えを発展させていきたい。」(2年災害科学科 三浦祐)

